

Pride and Prejudice : 結婚への道

Pride and Prejudice: Some Ways to Marriage

内藤 歆修

Kanshu NAITO

要 旨

Pride and Prejudice は広く知られるように、結婚を中心テーマにして、主人公である Elizabeth と Darcy が各々の過度な pride とそれが惹き起こす “prejudice” を、様々に起こる事件を経験して、克服し、結婚に到る物語である。

ここでは4組の夫婦が誕生する。理想的な結婚をするのは Elizabeth と Darcy の2人である。彼らは誤解による紆余曲折の道のりを経て、互いを真に理解して結婚する。姉の Jane と Bingley は人格的には優れていても、余り積極性が見られない。愛情は充分にあっても、理性的な相互理解が明確でない。

計算高く、実利的な Charlotte と愚かで傲慢な牧師 Collins は愛などない結婚をする。互いの人間性を考慮に入れない、損得尽の結婚である。親友 Charlotte の結婚に Elizabeth は鼻白む思いであった。残る Lydia と Wickham は男女の本能に従っただけの衝動的で、将来の展望もなく、理性の欠片もない結婚をする。

当初明るく元気で利発だが、才気走ったところが目立つ少女だった Elizabeth は Darcy との接触により、自己を客観的に見たり、自分の周囲の状況を理性的に認識できるようになった。

Elizabeth は Darcy と交際しながら、周囲の人たちの結婚を観察して、人の様々な生き方を熟考し、人間的成長を遂げて、結婚をする。

3組の結婚と Elizabeth の結婚を比較検討し、オースティンの理想の結婚を考えてみたい。

“Till this moment, I never knew myself.” (II, xiii)⁽¹⁾

これは主人公 Bennet 家の次女 Elizabeth が今まで高慢な気持から来る偏見をもって、誤解していた Fitzgerald Darcy の真の姿が理解できたとき、心から発した言葉である。出会った当初の Darcy の態度を第一印象で高慢であると決めつけ、美男子で人当たりの良い Wickham を素晴らしい男性と心をときめかすなど、人を判断するのに大きな誤りを犯してしまった。自分の判断力や人間性を見抜く力に大いなる自負心を抱いていた Elizabeth は第一印象で人を判断し、大きな誤解を招いてしまう。その後、幾つかの試練や困難を克服し、人間的成長をし、理性的認識をす

ることができるようになった。その結果、この誤解を解いて真に人を理解できたときに出て来た反省の言葉がこれであった。

Pride and Prejudice は最初に First Impressions と名付けられていたという⁽²⁾。Elizabeth は最初の題名の通りに、「第一印象」で Darcy に対して「高慢である」という偏見を抱いて、彼に悪印象を持つ。彼は友人 Charles Bingley などと共にメリトンでの舞踏会にやって来て、初めて公式に近隣の人々の前に姿を現した。打ち解けにくい性格で、連れの女性達としか踊らず、他の女性たちには紹介されるのさえ断って、もっぱら部屋中を歩き回り、たまに話をする時は仲間内ばかりで、一座の人々の反感を買った。Bingley に Elizabeth と踊るのを勧められた時も、次のように失礼な言葉で断った。

“She is tolerable; but not handsome enough to tempt *me*; and I am in no humour at present to give consequence to young ladies who are slighted by other men.” (I, iii)

不運なことに、すぐ近くに立っていた当の Elizabeth がこの言葉を聞いてしまった。貴族に近いという門地に、何の疑いもなく自負を抱いている Darcy の他人に対する優越的態度と、それに伴う傲慢な性格、あるいは若者特有のその場の雰囲気から来る景気の良い強がりなどで、粹がって当人に聞こえようとお構いなしにこの様な言葉を発したのかもしれない。勝ち気な Elizabeth はこの話を面白がり自ら吹聴して回ったが、実はこの侮蔑的な言葉に自己の“pride”をいたく傷付けられて、心中穏やかならぬものがあつた。やがて、Darcy のパーティでの評価は、

He was the proudest, most disagreeable man in the world, and every body hoped that he would never come there again. (ibid.)

という最低なものになってしまった。

Elizabeth は Darcy の言葉を聞いて以来、彼の尊大な態度、傲慢な振舞と思われるものに強い反感を覚えるようになった。彼を高慢で不快な男だとする彼女の第一印象はこの一件によって固められてしまった。物語は第一印象で一目惚れなどという甘い話でなく、主人公と女主人公の反目をきっかけとして展開していく。

このような態度を取った Darcy は、皮肉なことに相当早い時期から彼女に惹かれ始める。当然彼女はそのようなことを思いもかけていなかった。

Occupied in observing Mr. Bingley's attentions to her sister, Elizabeth was far from suspecting that she was herself becoming an object of some interest in the eyes of his

friend. Mr. Darcy had at first scarcely allowed her to be pretty; he had looked at her without admiration at the ball; and when they next met, he looked at her only to criticise. But no sooner had he made it clear to himself and his friends that she had hardly a good feature in her face, than he began to find it was rendered uncommonly intelligent by the beautiful expression of her dark eyes. To this discovery succeeded some others equally mortifying. (I, vi)

Darcy は Elizabeth に惹き付けられて行くが、同時に彼女に魅力を感じることを警戒している。その理由は次の文に示されている。

Darcy had never been so bewitched by any woman as he was by her. He really believed, that were it not for the inferiority of her connections, he should be in some danger. (I, x)

Darcy はペンバリー荘園から年収 1 万ポンドあり、幼少の時から階級に関して特別の教育を受けていた。豊かな恒産のある紳士は最高の存在であり、交際する相手を厳しく選択すべきであるという考えを植え込まれていたのである。それなのに、Elizabeth の叔父の 1 人はロンドンの商人であり、他の 1 人はメリトンの弁護士であると聞いた彼は、これは自分の世界の外にいる人たちであると思った。しかも、Elizabeth の家族の問題、殊に母親 Mrs. Bennet と、下の 3 人の娘の低俗なことは彼には到底堪えられぬことと思われた。「紳士」である彼にとっては、こういう縁者と肉親を持った Elizabeth は彼の心を捉える危険性はないはずである。だが、理屈の上でそうであっても、様々な機会に彼女に接し、やがてその内から放たれる知性の魅力や、濃い色の目の美しい表情で顔が大層冷冽に引き立って見えるのに気が付き始めた。その挙措の軽快さ、才気、いたずらっぽく屈託のない、物おじしない対応振りなどを日増しに快く感じるようになる。すると、心配していた警戒の必要性はますます増大して行くのである。

Elizabeth は因習に囚われない自由な精神、他人を思いやる繊細な感受性、思うところを直ちに行動に移す決断力、行動を可能にする逞しい肉体を備えた女性である。それは、第 1 巻第 7 章で、風邪で熱を出した姉の Jane の容態を危惧して 1 人泥濘のなかをネザフィールドへ出かけていく挿話から明らかである。彼女の魅力や美質は“brilliancy”という一語のなかに凝縮していよう。Darcy は最初の出会いは彼女を時の勢いで無視してしまったが、間もなく彼女のこのキラキラした魅力に気が付く。彼を取り巻いている Caroline Bingley たちの阿諛追従に食傷していた彼の眼には Elizabeth がいかに新鮮に映ったかは言うまでもない。

Elizabeth はこれについては全く気付かなかった。彼が高慢で自尊心が異常に高い男であるとい

う印象は彼女の気持ちに強く焼き付き、彼に対して嫌悪を感じることはあっても、好意を持つことなど思いもよらなかった。これに反して、彼は彼女をもっとよく知りたいと願うようになり、話しかける手初めとして彼女と他の人々との会話に注意し始めた。

Jane が心配で、ただ1人自宅から夢中で歩いて来た Elizabeth がネザーフィールドに着いた時の姿は、“with weary ankles, dirty stockings, and a face glowing with the warmth of exercise”(I, vii) という様子であった。Bingley は心から歓迎してくれたが、Darcy は最初は泥だらけになって到着した Elizabeth をそこまでしなくても考えた。しかし、“the brilliancy which exercise had given to her complexion” には見とれてしまっていた。夕食が済んで彼女は Jane の休んでいる二階へ引き込む。

暫くして Jane が眠ったので、彼女が階下に行くとは皆は応接間でトランプをやっていた。教養ある女性についてという話題が出ていて、Darcy が真に教養ある女性のごく少数しかいないと言うと、Miss Bingley はそれに直ぐ共鳴して、真の教養を身に付けた女性の条件は “a thorough knowledge of music, singing, drawing, dancing, and the modern languages” (I, viii) を持っているべきだと、更に多くの条件を出す。Darcy はもう1つその上に、“to all this she [a woman] must yet add something more substantial, in the improvement of her mind by extensive reading” (ibid.) という条件を付け足す。すると Elizabeth は

“I never saw such a woman. I never saw such capacity, and taste, and application, and elegance, as you [Darcy] describe, united.” (ibid.)

と反駁してまた部屋を出て行く。

Miss Bingley が教養ある女性の条件を更に厳しくするのは、女性一般の才能の弁護あるいは女性の能力への見栄を張るためである。Darcy がこれを受けて、更にもう1つ “something more substantial” が必要と言うのは、Miss Bingley の非現実的な見栄張りを揶揄する効果もあろう。Darcy 自身はそんなに高い条件を達成できる女性は数少ないと分かっている。そのような彼にこういう完全な女性がいるのだと主張している女性こそが最も理想からほど遠い位置にあるという皮肉な姿を、読者は強く認識させられる。Elizabeth は自らの理性的な認識により、見せかけの女性論を排し、完璧な女性が存在しないことを訴えているだけである。彼はこの会話で、ますます彼女の魅力に気が付くと同時に、彼女に自分との意見の一致を見出す。Miss Bingley たちの取り繕った虚栄を示す場面で Elizabeth に心理的共通基盤を発見している。

Darcy は Elizabeth に好意を抱き始めたが、彼女の方は彼の注目には気付いたもののそれが恋に通じる性質のものとは受け取っていない。これから暫く、Darcy は恋心を募らせて行き、Elizabeth は嫌悪を深めて行く過程を辿ることになる。

Elizabeth に Collins という新たな崇拜者が現れる。彼は Mr. Bennet の従兄弟だが、遠い親戚であって今まで Bennet 家とは殆ど付き合いがなかった。しかし、彼は限定相続人として Bennet 家に乗り込んで来ることになる。この男は自信過剰で特に自分より身分の低い人に対して尊大で、自惚れが強く、常に大袈裟で、愚かな喜劇的人物である。功利主義を地で行くような生き方をし、後見人の Lady Catherine de Bourgh という、Darcy の叔母の恩顧でロンボーンの教区牧師に抜擢されている。Bennet 家の人間にも資産が残るように、5 人娘の誰かと結婚する魂胆を持って訪問する。Jane は Bingley と婚約しそうだというので、Elizabeth に標的を定める。そこには愛情の欠片もなく、あるのは打算的な損得勘定だけである。Collins の Elizabeth への接近は実に抜け目のない計画に裏打されていた。まずはネザフィールドの舞踏会で最初の 2 回一緒に踊るように彼女に約束させた。次は母親に根回しして婚約を承諾させる。その上で、正式に求婚した Collins は Elizabeth に、“one thousand pounds in the 4 per cents. which will not be yours till after your mother’s decease, is all that you may ever be entitled to.” (I, xix) と金銭問題を挙げ、結婚をしつこく迫ったのである。身分的かつ経済的な実利的条件しか挙げない彼の人間性に反感を抱き、Elizabeth は求婚に強く抵抗する。

母親の方は Elizabeth でなければ、Mary でも Collins にくっつけようとするが、彼は彼女を諦めると今度は紹介されたばかりで交際の浅い Charlotte に臆面もなく求婚し、望みが叶えられる。彼は 3 日間で 2 人に求婚するが、Charlotte はこんな男でもあっさりと受け容れて、ハンズフォードの家に納まってしまう。Collins は Charlotte との結婚は決して愛がないと感じていたわけではなく、十分に愛情があると疑ってもいない。一方、Charlotte は Collins が Elizabeth に求婚したことを知っているし、その求婚も自分に対する求婚も、いずれも彼が愛のあるものと錯覚しているだけで、実際には愛などないことを見抜いている。計算高く合理的な彼女は将来の生活のために結婚したのである。しかし、2 人の結婚は互いの実利に有効であるが、本質的に Darcy と Elizabeth のように 2 人でいろいろな試練を乗り越えた相互理解に基づく信頼に裏打ちされた愛はない。

Elizabeth は自分と同じ価値観を分かち持つと信じてきた親友 Charlotte にどうしても納得できない考えかたと行動を見てしまった。自分が Collins の求婚を断わった後、Charlotte が辛抱強く彼の聞き役になってくれることを、友情に基づく行為と取ったのである。

Charlotte’s kindness extended farther than Elizabeth had any conception of. (I. xxii)

この一見親切と見えたものが実は夫探しの策略であったことを知り、Elizabeth は驚く。と同時に、ただ世俗的利害だけを考えた Charlotte の結婚観は彼女がこの長年の友人の実体にかかに盲目であったかを彼女に悟らせる。Charlotte にしてみれば、自分の「考え方」に従って男性を励ま

すことにより、将来のロングボーンの相続人の牧師 Collins を獲得したまでのことである。「上辺」と「実体」の乖離を手痛く経験した Elizabeth は現実認識が至難なことであるのを今さらながら痛感する。

しかし Elizabeth は以前、Bingley と Jane の関係をめぐっての会話のとき、結婚対象の男性に対する女性の態度表明についての Charlotte の考えを聞いている。Bingley と Jane は最初の舞踏会以来、互いに好感を抱くようになる。しかし、2人は心の中を相手や第三者に向かって、はっきり告げるような性質ではない。その上、Jane は穏やかな気質と快活さが結び付いた性格ではあっても、自分の気持ちを現すことがないので、Bingley に対して抱く愛情が傍目にはよく分からない嫌いがある。Elizabeth は姉のその控え目な態度は結構なことと思ひ、噂の種にならないのを喜んでいた。Charlotte との会話でこのことを話題にすると、彼女はそれでは当の相手にも気持ちが伝わらないではないかと言う。

“In nine cases out of ten, a woman had better shew *more* affection than she feels.”

.....“Jane should therefore make the most of every half hour in which she can command his attention. When she is secure of him, there will be leisure for falling in love as much as she chuses.” (I, vi)

また、恋人が相手の心を研究するのは無益で、結婚に際しては相手の欠点を知らない方が良いのだと主張する。しかし、Elizabeth は一般論として意見を述べた彼女のこの考えに反撥を抱き、真っ向からそれを否定する。結婚の根底に恋愛を前提としない点で、Charlotte の伶俐さはある種の徹底ぶりを示している。彼女は結婚前に相手の気心を知って置くなどということは結婚の幸福にとって無関係だと Elizabeth に説いている。

Charlotte の意見は必ずしも全面的に是認できるものではないが、実際には Jane に関しては正にこの愛情表現についての警告が的中してしまい、彼女に心配の種を与えることになった。この時点では Elizabeth と同様読者も愛情を二の次にした利己的な便宜主義を見て取り反発して、Charlotte の観察眼を評価せずに、そこから導き出された彼女の考え方に現われた俗物根性のみに目を奪われてしまう。

一方、Collins は牧師としての身分に箔を付けるために女性を物色するに当たって、その女性の資質や、互いの理解、精神的共鳴の程度などには大まかな考えしか持っていなかった。このような Collins と愛もなく、表面的には平和に生活している Charlotte の考え方は、結婚の根本に愛情を必須と考える Elizabeth にとって、理解に苦しむところである。親友として付き合い合ってきた2人には今ではわだかまりができて、心置きなく語り合う問柄ではなくなってしまった。Elizabeth には2人の間に、再び本当に打ち解けた関係が生まれることはあるまいと思われた。

Elizabeth は人を観察し、その性格を分析することが大好きで、家族をはじめ親類、友人、隣人などが彼女の研究対象となっていた。“People themselves alter so much, that there is something new to be observed in them for ever.” (I, ix) と考えているので、田舎住いのため対象に限りのあることも一向支障にならない。“quickness of observation” と “a judgment too unassailed by any attention to herself” (I, iv) にかなりの自信を持っていた。第1巻第13章における Mr. Bennet が Collins からの手紙を家族の者に読んで聞かせる場面で、未だ実物を見ぬ先に、あの尊大と卑下の奇妙に入り混じった彼の実体をほぼ正確に看破した。

“He must be an oddity, ... There is something very pompous in his stile.” (I, xiii)

この小さなエピソードに彼女の聡明さぶりが窺える。彼女は人を観察し、的確な判断を下せると自負している。それは他人の目にも明らかに映るらしく、Bingley は Elizabeth のことを “a studier of character” (I, ix) と呼んでいるが、これはアイロニカルな意味合いを帯びていよう。物語前半の彼女は才気煥発ではあるが、人間心理の複雑な機微に不案内な未熟な少女である。それだからこそ、臆するどころなく Darcy と対等に互り合え、作品の喜劇性が生れ得たとも言えよう。

軍隊がそれより少し前、ロングボーン近くの町に駐留して Bennet 一家は士官たちと交流する。Elizabeth は他の4人の姉妹たちと連れだって Collins と一緒にメリトンの Philips 家の晩餐会に呼ばれて行くと、そこに今町の噂になっている美男子 Wickham がいる (I, xvi)。Elizabeth は彼が先代の Mr. Darcy の家令の息子で先代から教会職を譲られる筈であったのを死後、Darcy がその権利を踏みにじったという話を、彼自身の口から聞かされる。この聖職禄のことで彼が不当な扱いを受けているという話は被害者 Wickham、加害者 Darcy と、彼女が割り切ってしまうに十分な話であった。彼女はこのような魅力的な美男子が自分だけに他人に聞かせられないような秘密を打ち明けてくれたと思い、満足し、その話を何の疑いもなく信じてしまう。彼の話術は、虚実を巧みに織り込み、Elizabeth の偏見にうまく取り入って、彼女が自ら迷妄の世界へと踏み込んでいくようにさせるものであった。

Wickham の巧みな話術に幻惑されて、Elizabeth は自分から “I have spent four days in the same house with him, and I think him very disagreeable.” (I, xvi) と Darcy への不快感を明白にしてしまった。彼女は自己の弱みとも言うべき偏見的態度を彼に悟られることになる。その後、彼女の気持ちを理解した彼のすることは Darcy に関する悪い表層的データだけを彼女に与え、彼女が誤った推測をするように仕向けるだけである。

“I have no right to give *my* opinion,” said Wickham, “as to his being agreeable or otherwise. I am not qualified to form one. I have known him too long and too well to be a

fair judge. It is impossible for *me* to be impartial.” (ibid.)

この言葉は裏を返せば、Darcy に会って日の浅い彼女の表面的な判断こそ公平だと暗示して、彼女の意見を尊重する姿勢を見せているのである。Wickham は相手の自負心を満足させ、ますます自分のペースに巻きこんで行く。

“The world is blinded by his [Darcy’s] fortune and consequence, or frightened by his high and imposing manners, and sees him only as he chuses to be seen.” (ibid.)

Wickham の語ることはことごとく自分の都合のよいように作られた言説でしかない。彼は Darcy 家から援助を受ける権利を剥奪されたと言うが、その理由を詳細には説明していない。逆に一方的に相手側の約束不履行ばかり非難している。ここに彼の話の胡散臭さが伝わって来る。彼は先代の Mr. Darcy の善行をひたすら誉め讃える。その効果は、半面、現在の当主 Darcy の卑劣さを強調することを狙っている。自分が保護を受けられるのを既成事実化してしまっていて、本当に自分がその保護を受けるに相応しいかどうかは一切問うことはない。この言動は彼の非常に独善的な姿勢を明瞭にしている。

Wickham は自分が貰うはずだった聖職禄を Darcy が取り上げたのは、自分の浪費癖や無思慮のためであったと言うが、その内容を全く説明していない。Darcy が聖職禄譲渡を拒んだのは事実だが、彼が牧師になることを諦めた真の理由は一切語られていない。彼の外見に魅惑されている Elizabeth は彼の話の、必ずしも虚構ではないが、彼に都合のよい説明に簡単に惑わされている。Darcy とは対照的な人好きのする態度によって彼女を魅了した彼は、彼女を特別にマークして素晴らしい印象を植えつけることに成功した。明らかに、彼に対する彼女の好意は Darcy への反感がもたらした必然的な反応であった。

オースティンは意識的、無意識的な自己表現としての「外観」がその人間の「本性」を多少なりとも反映するものであるという前提に立って Wickham も描いている。Elizabeth と彼の最初の出会いの場面で読者は彼の言動という「外観」が彼の「本性」を映し出していることに気付く。彼は初対面の相手である彼女に自分と Darcy との間の秘密をあからさまに語る。このような行為は常識から言っても極めて不自然である。事実、彼女自身、知り合ったばかりの彼からそのようなことを聞けるとは少しも期待していない。

...what she [Elizabeth] chiefly wished to hear she could not hope to be told, the history of his [Wickham’s] acquaintance with Mr. Darcy. (ibid.)

読者は自分がいかに高潔であるかを印象付けようとする Wickham の自己弁護に疑わしさを感じよう。読者のこの疑念が正しかったことは後に証明される。この時の彼女は Darcy に対して強い偏見を抱いているので、彼が自分を信頼して秘密を打ち明けてくれたのだと得意になり、彼の話を見聞きしている。彼女は偏見に捕らわれていなければ、彼の「外観」を通してその「本性」を見抜けたはずである。また、見抜けないまでも、彼の話に多少の疑問を抱いたはずである。慧眼を誇る彼女は Darcy の手紙によって真相を知るまでは、Wickham の擬装を見破ることはできなかった。彼女は彼に惑わされ、Darcy の人間性を見誤る。彼女は感覚的に、瞬時に人の性格を見抜く能力 (quickness of observation) はあっても、深い人間性を時間をかけて判断する洞察力は未熟であった。

Charlotte と Collins の婚約が成立し、Mr. Bennet の家督が娘の誰かに受け継がれる夢は消えた。Bennet 一家はせめて Jane が財産持ちの Bingley と結ばれることに望むが、そうこうしている間に Bingley 兄妹と Darcy はこの冬はロンドンで過ごすという便りが届き、“Hope was over, entirely over.” (II, i) と落胆する。

Elizabeth は好人物の Bingley を見そこなったと考え始める。

“...every day confirms my belief of the inconsistency of all human characters, and of the little dependence that can be placed on the appearance of either merit or sense.” (ibid.)

Elizabeth は「外見」は当てにならないものだというが、Wickham の「外見」にすっかり参っている自分には気付いていない。彼女は Wickham を、従って Darcy をも、彼の注文通りの眼鏡で見ていることになる。彼が捏造した Darcy に不利な話を彼女は易々と信じている。それで、“If it be not so, let Mr. Darcy contradict it. Besides, there was truth in his [Wickham’s] looks.” (I, xvii) などと言う。Bingley がネザーフィールドで開いた舞踏会で、彼の話の確証を Darcy の「顔色や拳動」の中に掴もうとしている。

Elizabeth thought with pleasure of dancing a great deal with Mr. Wickham, and of seeing a confirmation of every thing in Mr. Darcy’s looks and behaviour. (ibid.)

ここでも彼女自身は当てにもならない「外見」を頼りに矛盾した行為をしているのである。その場の状況で Darcy と踊った後、それに嫉妬した Miss Bingley に声をかけられる。

“So, Miss Eliza, I hear you are quite delighted with George Wickham ! — Your sister has been talking to me about him, and asking me a thousand questions.” (I, xviii)

Miss Bingley は自分の目の前で Elizabeth が Darcy と踊ったことに対する嫉妬から Wickham にまつわる事実を彼女に教えようとする。Miss Bingley は彼の正体は誰よりもよく Darcy 自身知っているということを承知している。Darcy にも聞える所で、このように言うことで、彼の見掛けの良さに簡単に参っている Elizabeth の愚かさを Darcy に見せつけようとしている。Darcy を自分の方に引きとめようという計算である。Elizabeth はこの時点では、Darcy に対する偏見の深みにはまっぴらで、Darcy 一派がグルになって彼の中傷をするつもりだろうとしか思っていない。その動機はどうか、実際には Miss Bingley の言うことは当たっているが、Elizabeth の眼には2人の男性に関してはすべてが逆さまに映っている。

好人物の Bingley も Darcy の人柄は保証しているが、Wickham に関しては必ずしも誉めてはいないことを Jane に語らせている。作者は巧妙にも、Bingley が彼を直接には知らないという言わばマイナスの証言をも付け加える。また、ここで Miss Bingley という腹黒い人物に彼の人柄を非難させて逆効果を狙っている。それで、一層 Elizabeth は Darcy に対する偏見を深めることになる。一面識もない人間の言うことが必ずしも外れているとは限らないし、腹黒い人物の言うことが全て嘘とも限らない。Elizabeth と視野を共有する読者もここで足をとられる。この後間もなく、Bingley がロンドンに立ち去ったことに、Darcy が一役買っていることを聞いて Bennet 家の女性たちは彼をますます憎むようになる。そして、Wickham の話で更に彼への嫌悪を深めて行く。彼の株は Darcy に反比例して上り、彼が流した Darcy の悪評は今や公然の事実として人々に認められている。

作品のちょうど半ばで、Bingley のロンドン行きが Darcy の仕業であったということが、Colonel Fitzwilliam の言葉で Elizabeth の確信するところとなり、彼への嫌悪感が最高潮になったとき、彼は突然彼女に結婚の申込みをする。彼女が Charlotte に招かれて滞在していた Collins の牧師館でのことであった。彼は切ない想いを打ち明ける。

“In vain have I struggled. It will not do. My feelings will not be repressed. You must allow me to tell you how ardently I admire and love you.” (II, xi)

Darcy はこの言葉に続けて、いかに強く彼女を愛して来たかを熱烈に語った。しかし、彼の言ったことはそれだけではなかった。Elizabeth への愛を披瀝する以上の熱心さで、彼女の地位や親戚関係が彼よりずっと低いこと、彼女との家柄違いの結婚がいかに自分の身を落とすものであるかを縷々と述べた。彼女と結ばれることは人間的下落であり、家族的障碍であるということが、自分の感情に反対する理性が常に持ち出す理由だったと熱心に述べた。Darcy には当然言って置くべきことと思われたが、Elizabeth がこれを恐れ入って聞いているはずはなかった。彼女は Darcy が傲慢な男だという、最初に受けた印象を変わらず持ち続けている。断固として、この風変わり

な求婚を断った。社会的身分の低さをそのまま人間的低さと見る彼の考えに Elizabeth は痛烈な反撃を放つ。

“I might have felt in refusing you, had you behaved in a more gentleman-like manner.”

(ibid.)

Elizabeth は Fitzwilliam 大佐の話から、Darcy が Bingley と Jane の結婚話を壊したと教えられている。大佐はその理由を Darcy が Elizabeth の叔父の 1 人が田舎弁護士、もう一方の叔父がロンドンで商売をしていることが気に入らないからだろうと言う。Elizabeth にとって Darcy は社会的身分に関して、最悪の高慢に冒されている人間である。彼は家柄が違えば、理性的に考えて簡単には恋愛は成就しないだろうと述べる⁽³⁾。Elizabeth は彼が Bingley と Jane の関係を裂いたことを非難する。彼女は返す刀で Wickham が説明した Darcy が彼に行なった酷い仕打ちをも攻撃した。Darcy は Bennet 家の社会的地位の低さを率直に指摘し自己弁護するが、Wickham の件は予測していなかったらしく、明確に弁解はしていない。この時の彼の求婚の仕方は紳士の名に相応しいものではなかった。彼は Elizabeth が彼の求婚を手厳しく拒絶した翌日、彼女の誤解を解くために、真相をしたためた長文の手紙を、付近の小径を散歩していた彼女に手渡す。

彼女はどんな内容か予想もつかず、ただ強い好奇心からそれを読み出す。この手紙が与えた衝撃は Elizabeth の精神発達におけるクライマックスである。手紙の要点は 2 つあった。第 1 は彼女の姉 Jane が Bingley を愛しているのを Darcy が引き裂いたという非難に対する弁解である。次は Wickham に対して Darcy が不当な扱いをしたという彼の言い分に対する反駁であった。

第 1 の問題は、自分は確かに 2 人の仲に干渉したが、それは Jane が Bingley を愛しているとしても、確かなものではなく、詳しい観察の結果 Jane の側に“any symptom of peculiar regard” (II, xii) が見られなかった為である。先に、女性の恋心は積極的に表明すべしという Charlotte の意見を巡る会話で話題になったように、Elizabeth は姉が実際より情感の少ない女性と思われがちであることを認める。この点で Darcy の推測は客観的に見て正しいものであった。次に Darcy は Jane の売り込みに際しての、Bennet 家の無作法な振舞いを非難している。ネザフィールドのパーティーでの Mrs. Bennet と娘たちの振舞いは無作法極まりないものであった。Mrs. Bennet は Mrs. Lucas に勝ち誇ったかのように Bingley と Jane の結婚話を聞かせる。Jane の結婚後は上層階級の人々と繋がりができ、次々に娘たちが金持ちの人々と結婚するのだと言い触らす。また、Mary は恥ずかし気もなく、自分の能力をひけらかすだけの歌を歌う。これらのことを観察した上で、彼女の親戚たちや家族が好ましくないのが、2 人の間を遠ざけても、さほど酷ではあるまいと思ったというのである。第 2 の問題は Wickham が公言していたこととは反対に、彼が恩知らずで破廉恥な行動を重ねて来たということである。Darcy の妹 Georgiana を誘惑して駆け落ちしようと

さえしている。この手紙を読んだ Elizabeth は当然のことながら、最初から何の疑念も挟まずに、書いてあることの全部を信じたわけではなかった。彼女はこの手紙が真実か、Wickham の話が本当か、相異なる2つの証言を前に、二者択一の決定を迫られたのである。

“This must be false! This cannot be! This must be the grossest falsehood!” (II, xiii)

Jane と Bingley の件と、Wickham の件について、自分の取った行動と動機を理路整然と述べる Darcy の手紙は彼女のこれまでの認識を完全に覆すものであった。この手紙を読み返しているうちに、Darcy と Wickham という2人の男性に対する判断が間違っていたことに気が始める。できるだけ公正になろうとしながら幾度となく手紙を読み返し、個々の事情をいきつ戻りつ考え直した挙句、その内容の真実性が胸に染み入るのを感じ、遂に Darcy の方が正しいと結論せざるをえなくなった。そういう結論に達したときの Elizabeth の気持ちは次のように記されている。

She grew absolutely ashamed of herself. — Of neither Darcy nor Wickham could she think, without feeling that she had been blind, partial, prejudiced, absurd.

“How despicably have I acted!” she cried. — “I, who have prided myself on my discernment! — I, who have valued myself on my abilities! who have often disdained the generous candour of my sister, and gratified my vanity, in useless or blameable distrust. — How humiliating is this discovery! — Yet, how just a humiliation! ...*Till this moment, I never knew myself.*” (ibid.) (italics mine)

Elizabeth は自分自身を知ると同時に、2人の男性をも知ることができた。こうした彼女の現実認識は社会的存在としての人間にとって、自己認識と他者認識は表裏一体であることを如実に示している。怒り、驚き、不安、恐怖の混乱状態から冷静な現実認識へと、読者の面前で展開されるこの Elizabeth 開眼の過程は認識のドラマ *Pride and Prejudice* のクライマックスとなっている。本論冒頭の彼女の言葉はここに収斂しているのである。彼女は己の識別力に対する過度の自負心のために眼が見えず、偏頗で、偏見を持ち、愚かになって、Darcy と Wickham の「本性」を見誤っていた自分を恥じ深く反省する。

ここで注目すべきは、Elizabeth が Wickham の正体を知っても、以前のような知的喜びを感じるよりは、己の盲目ぶりに苦痛・恥辱を感じていることである。引用文中、“humiliating” と “humiliation” という語が連続して使われて、彼女の心の痛みを表している。己の過ちを知るとは、特に彼女のような自信家にとっては大変に辛いことであり、屈辱的な経験である。そういう屈辱感があってこそ反省は本物の反省になりえよう。自惚れや思い上がりから謙虚へと至るのに

は、手痛い屈辱という辛い道を避けられなかったのである。

Darcy の説得が後に残る手紙の形で行なわれているは意味のあることである。会話での言葉は話されたその場で消えて行き、深い理性を働かせる時間的余裕がない。手紙は長い時間をかけて、確かな情報を積み上げ、理性的な判断を下すことを可能にする。ここで、Elizabeth は Darcy に理性的に推論することを教えられている。最初 Darcy の手紙をすぐに信用することができなかったが、熟考を重ねると、彼の言っていることは整合性があり、完全無謬であることが分かって来る。

Darcy の手紙によると、Wickham は牧師になる代わりに、もっと儲る法律関係の仕事に就きたいと援助を頼んだらしい。Darcy は彼が牧師には相応しくないと理解していたので、すぐにその援助願いを受け容れた。しかし、彼はその大金を浪費してしまう。その後の更なる援助を断った Darcy への復讐と財産目的で妹 Georgiana を誘惑し、駈落ちの寸前まで行った。証人の名まで挙げて記されていた。Elizabeth はこの説明に衝撃を受け、自分の盲目を悔いる。

曇りのない眼で、Wickham の言動を眺めてみると、Elizabeth は Philips 家での晩餐会で彼と交わした会話の内容を思い出す。彼は知り合ってまだ1日しかたっていない自分に、Darcy の非道さについて詳細に語って聞かせたことがいかに不適切であるかに気付いた。彼は Darcy と顔を合わせることを恐れはしないと強がりながら、ネザフィールドでの舞踏会に出てこなかった。Darcy や Bingley がネザフィールドを去るまでは、Darcy の悪口を Elizabeth 以外の者にはしなかったが、Darcy たちがいなくなると、町中の人たちに言い触らした。Darcy の父親への敬意からその息子の恥を暴露したくないと言っておきながら、遠慮会釈なく Darcy の評判を落とそうとした。この様なことが次々に思い出されて来るにつれて彼の幻惑から解放されると、Elizabeth は彼に関わるすべてのことが全く違って見えることに、あらためて驚かざるをえない。視点が 180 度回転したのである。Elizabeth は Darcy の手紙を解読することによって、生来持っていた理知的性質を働かせ、1つひとつ身の回りの事実を吟味し、Bennet 家の欠点や Wickham の本質を知るように教えられた。

この様に人間的成長をした Elizabeth ではあったが、作者オースティンは *Pride and Prejudice* を “too light, and bright, and sparkling”⁽⁴⁾ と評した。この “too” という副詞は *Pride and Prejudice* が小説として、余りにも軽妙すぎるという考えを表しているのであろう。Elizabeth は人間にとって最も困難といえる自己認識を Darcy の手紙を読んだだけで、いとも容易く成し遂げてしまった。リアリズムの観点から言えば、これはありえざることである。ありえざることを作品の中に取り入れることを極度に警戒していたオースティンはこのイギリス小説のヒロインのなかでも最も魅力的な Elizabeth も “too light”、“too bright” と思え、気になったに違いない。しかし、Elizabeth の現実認識の度は勢いを増し、更に急速に深まって行く。そして、Wickham の場合と同じように理知的に論理を積み重ね、今度は自分の家庭の真の姿や Darcy の人柄を正しく認識することが求められる。

Darcy の手紙の Elizabeth への影響は彼女がロンボーンの自宅に帰ってからも続き、その後の Elizabeth の人の見方一般に影響している。自宅では妹達のがさつな態度に嫌気がさし、自分の家庭の欠点にはっきりと気付く。Darcy の意見が正しかったことを実際に体験する。その究極は Lydia の歓楽地ブライトンへの旅行に伴う事件である。Elizabeth は父親に Lydia のブライトンと行きを止めさせ、Bennet 家のモラルを下落させないでくれと頼む。だが、父親の返事はブライトンへ行けば、Lydia は殆ど無視され、身の程を知ることになろう。彼女は一度は痛い思いをしなれば、自己の価値の低さを悟ることがないであろうと言ひ、ブライトン行きを許し、後の騒動の誘因を看過してしまう。

Elizabeth は Darcy によって開眼された後、Wickham の魂胆や不自然な慇懃ぶりを見抜くことができるようになった。軍隊と共に Wickham がメリトンを去る前に、彼女は彼にハンズフォードでは、ロージズ邸に滞在していた Darcy や Fitzwilliam 大佐に会えたと語る。彼女はその時の彼の不決な顔つきを見逃さない。この2人は彼の後見人で、彼の過去の行状を全て知っているはずである。Elizabeth が徐々に Darcy の人間性が分かって来たと語ると、Wickham は更に落ち着きを失う。Darcy への中傷が感づかれた公算が高いと推測したのであろう。彼の狼狽ぶりは

“Wickham’s alarm now appeared in a heightened complexion and agitated look.”

(II, xviii)

と表されている。Elizabeth にも Wickham への憧れという迷妄があった。合理的な判断力に優れているように見えた彼女にもオースティンの作品によく認められる精神の迷いの状態があったのである。彼女は彼の魅力的な概観に騙され、Darcy の優れた人間性を見誤ってしまった。彼女は感覚的に、瞬時に人の性格を見抜く能力はあっても、人生経験が浅いため、深い人間性を時間をかけて判断することには慣れていなかった。

第3巻⁽⁵⁾は舞台が Darcy の邸ペンバリー荘園へ移った所から始まる。第2巻の最終部は“To Pemberley, therefore, they were to go.”という独立した一行である。次の舞台に何かが用意されている。

そこには Elizabeth に Darcy の真の姿を知らしめる場面が用意されていた。眺望の素晴らしい広大なペンバリー荘園を眺めながら、Darcy の邸宅に行くと、威厳のある面持ちの、相当年輩で慇懃な家政婦の Mrs. Reynolds がその内部を丁寧に案内してくれた。部屋から眺めた荘園の眺めは格別であった。家具調度品の類は派手さはなかったが、優雅で趣味の良いものばかりで、これらは主人の Darcy の飾りのない、率直な人柄を反映していた。また、Mrs. Reynolds は言葉を極めて Darcy を称え、彼が考えられる最上の主人であることを受け合う。Elizabeth はこの夫人が威厳のあることや家政婦としての丁寧さの点から信用のできる女性であることを否定できない。夫

人は Darcy が自分の家族集団を大事にするのと同様に小作人や使用人にも気配りを欠かさない優しさをもっていると言う。彼女の Darcy 礼讃は Wickham の Darcy 中傷とはっきりとしたコントラストをなしている。この結果、Elizabeth は Darcy について次のような評価をしている。

As a brother, a landlord, a master, she [Elizabeth] considered how many people's happiness were in his guardianship!—How much of pleasure or pain it was in his power to bestow!—How much of good or evil must be done by him! (III, i)

この評価は彼の人柄に対する Elizabeth の考えを変えさせるものであった。ペンバリー邸の女主人になることは Darcy の愛を受け容れることと瞬間的に交錯する。自然の讃美と Darcy への憧れは重なり合う。ペンバリー荘園の風景は人間化され、彼女にとって Darcy の人格を表わす。彼女は森に蔽われた高い山々を背景に建っているペンバリーの邸を見渡したとき、

...and at that moment she felt, that to be mistress of Pemberley might be something!
(III, i)

とふと思ったと彼女の内心が表白されている。

Elizabeth はこれより以前、Wickham が彼女から遺産目当てに Mary King に心を移したという話題のとき、Gardiner 叔母に向かって次のように言ったことがあった。

“...what is the difference in matrimonial affairs, between the mercenary and the prudent motive? Where does discretion end, and avarice begin?” (II, iv)

こういった Elizabeth の考えはペンバリーを見たとき、心が Darcy に傾いた要因の一部となり、無意識に吐露されたと言えよう。

この後明らかになるが、Darcy は Elizabeth に最初に求婚して断られた頃から、その態度が目に見えて慇懃となった。これには彼女を始め、今までの彼を知る多くの人々が驚いた。一方、彼女は何時から彼を愛するようになったのであろう。彼女から Darcy に対する恋心を打ち明けられた Jane は何時から彼に愛情を抱くようになったのか尋ねる。それに対する Elizabeth の答えは次のようなものであった。

“It has been coming on so gradually, that I hardly know when it began. But I believe I must date it from my first seeing his beautiful grounds at Pemberley.” (III, xvii)

Janeはこの答えを聞いたとき真面目なものと取らなかった。では、Elizabethは上の答えを不真面目に言ったということになりそうであるが、果たしてどうであろうか⁽⁶⁾。

冒頭の有名な言葉、

It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife. (I, i)

は裏側から見ると、余り財産を持っていない男性は妻を得ることが難しいとも取れる。作者オースティンは最初から結婚と男性の財産は密接な関係があり、当時の女性にとって結婚は生涯に亘る職を得ること、即ち安定した生活を営む最大の手段の1つであったことを念頭に置いてこの作品を書いていたと考えられる⁽⁷⁾。この作品には、財産はなく、借財が多いWickhamとLydiaの結婚、牧師Collinsと財産のために「合理的」な手段で結婚したCharlotteについてのElizabethの評価など、財産に直結した典型的な結婚の例が示されている。財産と人柄の良さを両方備えたBingleyとDarcyの愛を各々獲得したJaneとElizabethは最良で望外な結婚ができたというべきである。作者の結婚に関する冒頭言葉は最後までこの作品の主題の座を明け渡していない。

その結婚に更に堅固な基盤を与えるために、今1つオースティンは工夫を凝らしている。必然的な筋立てを伴って、偶然的な出来事を小説中に持ち出して来る。Darcyは執事への連絡事があり、Elizabeth一行の帰り際に荘園に到着した。不在だと聞いていたDarcyは旅先から不意に帰って来て、彼女に対してのみならず、先の求婚の折に商人を軽蔑し身分の低い親戚であると言って、抵抗を示したMr. & Mrs. Gardinerにも鄭重に対応する。まるで人が変わったように尊大さが薄れたDarcyのこの態度に彼女は驚きを禁じ得ない。その上Darcyは彼女に妹のGeorgianaも紹介した。

And his behaviour, so strikingly altered, — what could it mean? That he should even speak to her was amazing! — but to speak with such civility, to enquire after her family!

(III, i)

この時既に、Darcyのこの態度が不自然だと思わないだけの心の準備がElizabethには整っていた。彼女には彼の態度が以前に別れた時と全く違って見える。彼は実際、とっさに遭った彼女に自発的に自然な態度で、親愛の情を示した。高慢な彼は以前と変わり彼女や叔父夫妻までも友好的に接し、丁寧に積極的に迎え入れている。その結果彼は商人ではあっても、聡明さ、礼儀正しさ、更には優れた人格を表すMr. Gardinerと接することによって、限られた交際範囲からより広

い世間に目を向けること、人間を身分に拘らず一個の人格として虚心に見ることを学ぶことになった。

ペンバリー訪問は Elizabeth にとって理性的認識に到る一過程であり、これで完結したわけではない。彼女が Darcy の愛情を十全に受け容れるのに、まだ数ヶ月をかけて彼への認識を深め、2 人への誤解を完全に解かねばならなかった。彼女の自己認識に到る最後の試練は Lydia の駆け落ちであった。彼女は彼との仲もこれで終わりだと覚悟をした。またもや、愛憎のクライマックスの場面で、2 人間に大きな事件が起こった。最初は Darcy に対する反感が最高潮になったときの彼の突如な求婚であり、次は 2 人の愛情が同時に高まったときの想像を超える Lydia の駆け落ち事件であった。

Wickham は魅力的な容貌と優雅な挙措で人を惹き付け、応対も如才ない。これまでに数多くの女性たちの心を魅惑して来た。Darcy の妹の Georgiana は危うく彼と駆け落ちするところだったし、慎重なはずの Elizabeth も一時は彼に夢中になった時期があった。しかし、彼はそれらの女性に囲まれても、特定の女性に熱中するということにはなかった。その彼が特に Lydia と駆け落ちすることになる動機は何処にあるのであろうか。彼の魅力の虜になった Lydia に押し切られて、駆け落ちしたのであろうが、狡猾で、経済的に困窮している彼が、何の金銭的利益をもたらさないと分かっているながら、彼女の衝動的情熱に負けて、行動するとも思えない。多くの読者にとって、彼と Lydia との駆け落ちは、余りにも出し抜けな、理由の稀薄な行動のように感じられる。作者はこの駆け落ちを Darcy と Elizabeth の結婚を進めるプロットの上で必要な事件、即ち、Darcy に関する Elizabeth の新たな認識を更に確実にする機会を提供する手段として、読者に提示しているようである。“resentful” (I, xi) な気質を簡単には捨てきれないと自ら告白する Darcy は、過去に散々自分を手古摺らせた Wickham のために、誰にも知らせずに大金を出して、Lydia との結婚を取り計らってやる。Bennet 一家は大変な不名誉から救われたのである。この行動は彼の人柄が大きく変わり、好ましい人間になったことを十二分に示すものである。

結婚という形式がもたらすものは、いかに実質が伴わないものであっても一応の社会的信用、パスポートである。Elizabeth はそれを Lydia が回復したことを理解し感謝する。同時に結婚という枠の中に結婚生活が続く限り永久に封じ込められた不幸を見て奇妙な感じに打たれる。結婚という社会的な形態はその中に幸福も不幸も取り込んで一対の夫妻として社会に位置を占める機能である。実際情熱が道徳より強かったというだけで結びついた Wickham と Lydia の 2 人にはこれから先の幸福は危ういものであった。彼の愛情はすぐに無関心へと転落し、彼女の方はそれより少しだけ長持ちした。彼女はその若さと行儀にも拘らず、結婚生活が与えた世間的信用を捨てるようなことはしなかった。Lydia の結婚は「情熱」即ち個人の感情だけに引きずられたものであり、Charlotte の結婚は社会的な便宜の為になされたものとして両極にある。

この様な、結婚にまつわる幾つかの事件の果てに、Elizabeth と Darcy はお互いの高慢と偏見を

克服し、それらが原因となって生じた誤解を解くことができた。彼女は印象や感情といった不確かなものに影響されることなく、確かな観察眼に基づいて得られた経験と正しい理性的推論による理解力を獲得し、人間的成長遂げた。そして、彼が社会的身分においても人格においても、正しく紳士であることを確信した彼女は彼の再度の求婚を感謝と喜びをもって受け入れたのである。

注

- (1) Jane Austen: *The Novels of Jane Austen* vol. II, *Pride and Prejudice*, ed. R. W. Chapman, 1923; rpt. Oxford: Oxford University Press, 1987
Pride and Prejudice からの引用は、以後、チャップマンの区分に従って、本文中に記す。(I, i) は第1巻第1章を表す。
- (2) Ibid.
Introductory Note to *Pride and Prejudice*, p. xi
- (3) A. Walton Litz: *Jane Austen; A Study of Her Artistic Development*, New York; Oxford University Press, 1965, p. 105
Darcy is mindful of his relationship to society, proud of his social place, and aware of the restrictions that inevitably limit the free spirit. Together they dramatize the persistent conflict between social restraint and the individual will, between tradition and self-expression.
- (4) Jane Austen: *Jane Austen's Letters to her Sister Cassandra and Others*, ed. R. W. Chapman; London; Oxford University Press, 1964, p. 299 A letter to Cassandra Austen. 4 Feb. 1813
- (5) *Pride and Prejudice* は3巻に別れていて、各巻の分け方は物語の展開上、綿密に計画されている。
- (6) Alistair M. Duckworth: *The Improvement of the Estate: A Study of Jane Austen's Novels*, London; The Johns Hopkins Press, 1971 p. 124
このことについて次のような説明がある。
...when Elizabeth comes to exclaim to herself that "to be mistress of Pemberly might be something," she has, we might conjecture, come to recognize not merely the money and the status of Pemberly, but its value as the setting of a traditional social and ethical orientation, its possibilities — seemingly now only hypothetical — as a context for her responsible social activity.
- (7) Dorothy V. Ghent, *The English Novel; Form and Function*, New York; Holt, Rinehart and Winston, Inc. 1953
結婚と経済問題というテーマは個人的な問題のみならず、社会的問題としても捕らえられ、金銭抜きの結婚が理想的な結末になるかどうか論じている。